国際高等研究所
創設 30 周年記念フォーラムレポート

# 人·幸福·未来

## ～人類·その超えるべき課題の先の未来～

# はじめに

私たち人類と地球は、現在、様々な要因で持続的生存が脅かされる諸課題に直面しています。国際高等研究所（以下、高等研）の理念である「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」とは、持続可能社会の実現のための課題を探求し、発見し、社会に問いかけ、皆で議論し、解決策を国境や立場を超えて「一緒に考えていく」ことです。この理念のもと、高等研は設立以来、持続可能社会の実現に向けて様々な研究活動を展開してきました。しかし、経済格差、貧困問題、食糧問題、環境問題など、世界はますます持続不可能な方向に突き進んでいるようにも映ります。このような状況において、高等研の掲げる基本理念は、色あせないばかりか人類と地球の未来に対してますます今日的な意味をもつものと自負しています。

2014年8月に設立30周年を迎え、改めて高等研の存在意義やこれからの活動の方向性を広く認識していただく機会として、創設30周年記念フォーラムを開催いたしました。フォーラムをとおして「人類・その超えるべき課題の先の未来」という主テーマを置き、持続可能社会のあり方について、「幸福観」、「安心・安全」、「科学のあり方」、「社会のあり方」といった観点から議論を繰り広げました。大阪、仙台、東京、京都における計4回のフォーラムをとおして、1,000名を超える多くの方々と高等研の持つ問題意識を共有する機会となりました。今後も人類の幸福や地球の持続可能性に真摯に向き合い、社会で見過ごされてきた問いかけを行ってまいります。本レポートはフォーラムの一端ではありますが、皆様と共に歩む一助となることを祈念します。

# 人·幸福·未来 ～人類·その超えるべき課題の先の未来～

## INDEX


第1回 | 大阪フォーラム テーマ「持続可能性と幸福観」 …… 3

第2回 | 仙台フォーラム テーマ「持続可能社会の構築と安心・安全」 …… 5

第3回 | 東京フォーラム テーマ「持続可能社会の構築と科学」 …… 7

第4回 | けいはんなフォーラム テーマ「人類・その超えるべき課題の先の未来」 …… 9

# ご挨拶

## 国際高等研究所としての固有の価値の創出を目指して

高等研の設立にあたりましては、発起人の中心人物であり初代理事長をお務め頂いた元京都大学総長の奥田東先生、また関西をはじめ全国の産学公民の多くの皆様のご協力を賜りました。『成長の限界』に触発された奥田先生は、日本社会が高度経済成長に沸く中、人類や地球の持続可能性の問題にいち早く着目され、高等研の必要性を提唱されました。高等研はその使命として、基本理念のよりよい具現化をすすめるとともに、現代社会と次世代に対する役割と責任を継続的に果たさなければなりません。高等研は、移り変わりが激しく、短期的な成果が求められる今日の社会において、長期的な視点で人類の未来と幸福を考える稀有な場所であります。一方、価値観が多様化し諸課題が複雑化した今日の社会において、これからの高等研の活動は、ソーシャル·コミュニケーションを強化し、社会的·公益的価値の最大化を図り、さらには国内外の財団や研究所との協働基盤も整え、シンクタンク機能も果たしながら、利害関係が交錯する課題に取り組み、関係者の態度を変えるところまで踏み込む必要もあるでしょう。我々のもつ問題意識を国内外に発信し、社会に問いかけ、そして議論し、解決策を考え、研究成果の社会実装を目指しながら、高等研としての固有の価値を創出し、提供しつづけられるよう取り組んで参ります。

公益財団法人
国際高等研究所

理事長
**立石 義雄**

## 人類と地球のあるべき姿を世界に対して問う

人類や地球の持続不可能性を目の前にして、人類がお互いに平和的に共存していくためには、日本人が歴史的に築き上げてきたものの考え方の重要性を世界に問いかけることが大切です。高等研は、日本の歴史において文化的·経済的価値を蓄積してきた京阪奈の中心にあって、日本の優れた文化、芸術、技能、技術、風土、環境を俯瞰し、課題の発見から解決まで、それらを総合できる位置にあります。現在、地球社会が直面している種々の困難な現状を俯瞰的に把握したうえで、日本から、高等研からしか出来ないこととして、「将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方」、「循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策」、「多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策」「けいはんな学研都市の30年後のあるべき姿」という4つの課題に集中して取り組んでいます。教育者、科学者、企業人、知識人、宗教者、一般市民が、国や組織、分野を超えて集い、自由な雰囲気と規律の下で議論を展開し、文化、社会、経済の新しい方向性を見い出し実践する起点として、高等研はこれからも研究活動を通して人類と地球のあるべき姿を世界に対して問い続けます。

公益財団法人
国際高等研究所

所長
**長尾 真**

京都大学名誉教授
京都大学元総長

# 「持続可能性と幸福観」

基調講演

テーマ

## 日本人の精神力とは

講師 千 玄室
茶道裏千家大宗匠（15代・前家元）、ユネスコ親善大使

昭和39年千利休居士15代家元を継承。裏千家今日庵庵主として宗室を襲名。平成14年嫡男に家元を譲座し、千玄室に改名。「一盌からピースフルネスを」の理念を提唱し、国際的な視野で茶道文化の浸透と世界平和を願い各国を歴訪。現在の主な役職にユネスコ親善大使、日本・国連親善大使など多数。文化功労者国家顕彰、文化勲章など多数受章。

茶道裏千家ご厚意による呈茶席を設けました

理事長による開会挨拶

### 失われつつある日本人の精神力、「和魂漢才」の心を忘れずに

幸福とは幸（さち）と福（ふく）という字を書きます。本当の幸せとは、「仕え合う」と書いて「仕合わせ（しあわせ）」になるのです。自分の前にお茶が出されたら、当然自分が飲めばよいところ、わざわざ隣の人に「如何ですか」と勧め合う。こうして勧め合うことによって、お互いの人間関係の和が生まれます。人のものをいただくにしても分け合う。「お先にいただきます」、「頂戴します」、そういう気持ちが、日本人の心構えとしてずっと長い間育まれてきたのです。お米一粒一粒を「有り難うございます」、「もったいのうございます」、そういう気持ちでご飯をいただいていたのです。「有り難い」。有り易いでなく、難しい。簡単に有り難うございますと言っていますが、最近の言葉には心が入っていません。本当に心や頭の先からつま先までしっかり「有り難うございます」と言えることが、人間としての一番大事な教養であり、日本人の正しいあり方です。お箸にもきちんとした持ち方、使い方があるのです。そういうことをしっかりと教えることが、日本人の精神力を付ける大切なポイントになるのです。科学技術などすべてが発達した世の中にあって、人間がロボットになってはいけないのです。人間にとってもっとも大切な「心」を家庭の中できちんと教えなければならないのです。「次の世代」や「未来」とよく言われますが、今をしっかりしなければ、未来も何もありません。

大和魂という言葉は源氏物語に書かれていますが、最近は軍国主義の表れみたいに言われ、戦後言わなくなりました。ヨーロッパ的なものに価値があり、それを身に付けた人がインテリみたいに思われ、洋魂洋才になってしまいました。実際の大和魂とは、優雅な奈良朝から平安朝の貴族文化、貴族社会の中で育った人の優雅さ、そして自分たちの心を顧みることが大事であるという日本人の大きな精神であります。和魂漢才の心をどうか忘れないでほしいのです。

### 人のために祈るということが、人間として一番大事な心

日本人の心は情けであり、情の心を磨いて、本当の素晴らしい人間に成長していくために「道」があり、成り立っていく。茶道はそれを代表するもの。日本人の精神の一番大事な教えとして見ていただき、嗜んでいただくことが大切であります。

自分の幸せのために人の幸せを祈りましょう。人のために祈るということ自体が人間として一番大事な心なのです。自分の幸せのためにお互いに手を貸し合って支え合っていこうではありませんか。本当の真摯な気持ちが生まれてこそ、初めてひとつの大きな「輪」ができ、その輪こそが本当の「和」なのです。そこに本当の幸せが生まれ、初めて未来が見えてくるのです。

2014年8月21日（木）
グランフロント大阪
コングレコンベンションセンター
参加者：約460名
後援
茶道裏千家　一般財団法人今日庵、公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構

世界には発達段階や文化などが異なる社会が混在しています。人類がこのままの形でそれぞれの幸福観を追求するとしてもすべてを成就することはかないません。持続可能社会の構築に向けて、多様な幸福観がうまく揉めながら共存し合うような多様性を包含する社会や幸福観の構築が出来るのでしょうか。

人·幸福·未来

講演&パネルディスカッション

テーマ

# 持続可能社会と私たちの幸福

## 経済的豊かさ以外の軸をもつこと、自己の幸せの尺度や価値観を大切に

「江戸時代は調和のとれた資源循環型社会の究極の姿であった」と指摘する笠谷氏は、「日本は欧米の物質文明に比べて貧しいが決して悲惨でなく、人々の生活は簡素であるが満ち足りており、十分に幸せである」という当時の日本を訪問した外国人の感想を示唆として、「知足」という概念を見直そうと提唱しました。稲場氏は、「東日本大震災を契機に幸福観に変化が起こった」と指摘します。無縁社会から一転して目覚めた利他的遺伝子を意識して、「無自覚の宗教性をベースとした、物質主義ではない、倫理・価値観に基づく社会を作ろう」と呼びかけました。「所得は向上したが幸福度は高まっていない」という草郷氏は、水俣やブータンでの実地調査を通して近代開発モデルの再検討が求められているとし、「経済的豊かさ以外の軸を持つこと、自分の持っている幸せの尺度や価値観を大事にすること」の重要性を指摘しました。「いのちの電話」の活動を通して様々な悩みの相談を受けてきた平田氏は、「社会から孤立した方々が増えている」という現場を目の当たりにして、人と人とがつながること、寄り添って話を聞くこと、共に悩み共に考えるという、人として当たり前のことが何より大切であると話されました。

## 幸福とは、捕まえたと思うと消えてしまう青い鳥のようなもの

現代の世界には政治経済の状況や文化の形が異なる様々な社会が、時には相互に密接に、あるいは希薄に関わりながら、バランスの取れない難しい形で混在しています。そのような社会がそれぞれ内包している幸福観、幸せについての考え方も多様ですが、このような社会に生きる人々がこのままの形で幸福を追求していくと、間違いなく地球のキャパシティを超えてしまい、また幸せの追求が不幸をもたらすことすらあるかもしれません。幸福とは、持続可能性などを考える際に初めて意味をもつものであり、捕まえたと思うと消えてしまう青い鳥のようです。持続可能性は、個人レベルで命をつなぐというミクロな側面から、地域社会や地球などマクロな側面まで、様々な観点をトータルに連続的に捉える必要があります。多様な価値観があるなかで、良し悪しでなく、他人に耳を傾け、意識すること、他人を不幸にしないこと、あるいは自分が不幸にならないことを追求することが重要なヒントになるかもしれません。このとき、日本の道徳、倫理、行動規範のような、現代では見えにくくなっているものを再評価して広げていくことも重要な意味をもつものです。幸せとは何か、世界を見渡して相対的に経済的豊かさを実現している日本が、心の余裕をもって考え、発信出来ることではないでしょうか。

文責：高等研事務局

パネリスト

稲場 圭信

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

宗教の社会貢献活動や利他主義などを研究。全国の避難所等を集約した「未来共生災害救援マップ」を構築しWeb上に公開。

笠谷 和比古

国際日本文化研究センター研究部教授・伝統文化総合研究プロジェクト長

専門は歴史学（日本近世史、武家社会論）。近世の国制と天皇制、武士道の思想と行動形態を研究。

草郷 孝好

関西大学社会学部教授

専門は開発研究（人間開発論）とアクションリサーチ。国内外の生活現場に足を運び、実践的協働研究を展開。

平田 眞貴子

京都いのちの電話 常務理事

眠らないダイヤルとして様々な相談を受け付ける「京都いのちの電話」の活動に、開局から30年以上に渡り従事。

コーディネーター

小泉 潤二

国際高等研究所　副所長・大阪大学特任教授・日本文化人類学会前会長・国際人類学民族科学連合（IUAES）事務局長

文化人類学、中南米研究、解釈人類学、グローバル化、社会経済変容、コンフリクト研究、国際協力など多方面で活動。

所属・役職はフォーラム当時のものです

# 「持続可能社会の構築と安心・安全」

開会挨拶

東北大学名誉教授、東北大学元総長
科学技術振興機構顧問
阿部 博之 氏

2015年1月24日(土)
**ウェスティンホテル仙台**
参加者:約140名

**共催**
京都府、京都商工会議所、
公益財団法人関西学研都市推進機構

**後援**
東北大学、仙台商工会議所、
宮城県商工会議所連合会、
東北六県商工会議所連合会、
河北新報社、学都仙台コンソーシアム

基調講演

テーマ

## 森は海の恋人 人の心に木を植える

講師 畠山 重篤
NPO法人 森は海の恋人
理事長

高校卒業後、家業の牡蠣養殖業を継ぐ。海の環境を守るには海に注ぐ川、さらに上流の森を守ることの大切さに気付き、漁師仲間と「牡蠣の森を慕う会」を結成(2009年、現法人を設立)。1989年より漁民による植林活動「森は海の恋人運動」を行っている。朝日森林文化賞、国連森林フォーラム「フォレスト・ヒーローズ」など多数受賞。

### 人々に森と川と海が一つのものという意識を植える

私は長くカキ養殖に従事してきまして、沿岸域の漁業を守るには、気仙沼に注いでいる河川流域の背景が大事だということを身を以て知らしめ、その保全に努めてきました。今回の大震災後の沿岸域復興をみますと、その背景をきちんと整えていたことが、海の早期復興につながったと確信しています。最初は「漁師が山に木を植えるなどマスコミ受けするようなことをして」と言われる時代もありました。しかし、千年に一度という津波を体験し、それを生き抜き、未来につながるような生活を築きつつある今、遠く「未来」というものを考えた時に見えてきたものがありました。

沿岸域の海をだめにする諸々の原因は太平洋側から来るのではなく、全て人間側から来ているのです。それまで海ばかり見ていましたが、初めて気仙沼湾に注ぐ大川の河口から上流まで自分の足で歩いてみて、川の流域は人間模様が錯綜していることが分かりました。そこで平成元年から大川の流域に木を植え始め、今では大川流域は生物側から見ると日本で2番目に良い川だという人もいます。それは川の流域に住んでいる人々の意識の違いがあるのです。ここが非常に重要で、講演タイトル「人の心に木を植える」というのはそういう意味なのです。川の流域で毎年植樹祭をしていますが、木を植えると同時に、川の流域に住んでいる人々に、森と川と海が一つのものだという意識を植えているのです。

### 復興計画には、行政・学問の枠や境界を越えた発想が大事

活動を通してそこから見えてきたものは、行政の縦割り、学問の縦割りの問題でした。海は水産学、川は河川生態学、山は林野学。全部ばらばらで、トータルにものを見ていません。そういう教育を受けた人が官公庁や会社に入り、ますます発想が縦割りになっていくのです。日本にある35,000の川の流域で人間の生活は営まれていますが、悲惨な状況です。ダム湖に溜まっている養分をどうやって海まで安定的にもってくるかというような境界を越えた学問をやっていただきたい。

仙台の海の恵みはロシアのアムール川流域の大森林から届いており、離れているように見えても、全てつながりを持っているのです。大震災を受けてその後の復興計画を考える際、基準は「人命が大事か、自然が大事か」という発想になり、妥協点を探らなくてはならなくなります。その時に、自然界・生物学の関係を遮断してしまうようなことであれば、結局そこに住む人々の暮らしは成り立たなくなります。地域の実情を考慮しトータルで物事を考え、その技術を世界に発信していくのが、大震災を経験した日本の役割なのです。

東日本大震災を機に、日本人のみならず世界中の人々が安心・安全に大きな関心を寄せています。安全な社会の構築には、環境問題、経済成長、エネルギー政策、倫理など、長期的かつトータルな視点が必要です。持続可能性と安全という二つの価値を目指すとはどういうことなのでしょうか。

人・幸福・未来

パネルディスカッション

テーマ

# 二つの価値を目指して

## ～ 持続可能性と安全 ～

### 社会的共通資本を次世代につなぐことが持続可能社会の基本・基盤

従来から「知の精神文化」の構築を提唱している阿部氏は、「大震災を教訓とする科学技術文明の在り方の議論が必要な今こそ、安全・安心な社会、国、世界とその持続的な発展を目指すために、倫理あるいはエートス（民族や社会集団に行き渡っている道徳的な慣習）が大切である」と述べました。鈴木氏は、「福島事故の最大の課題は、政府・科学者に対する国民の信頼喪失にある」と指摘します。信頼回復には科学技術に係る社会意思決定のプロセスの構造改革が必要で、行政における意思決定の透明化と公平性、意思決定過程への国民の参加、第三者機関の設立を提案しました。野家氏は、「放射性廃棄物の処理問題は現存世代の幸福のために未来世代にリスクを負わせるという世代間倫理の問題が典型的に表れている」と言います。自然環境、社会的インフラ、教育・医療などの社会的共通資本を現存世代で使い果たすことなく次の世代へ継承することが持続可能社会の基本・基盤であると述べました。長谷川氏は、20年前の阪神淡路大震災以降、スマトラ大津波、東日本大震災など大変大きな災害がアジア太平洋地域で起こっていることから、「これまでの持続可能性の概念にレジリエンス（災害に対して復活力のある強い社会）という新たな視点を入れることを、日本から世界に向かって発信していくべきだ」と主張しました。「国民が科学技術に期待することは安全と安心である」と主張する薬師寺氏は、どこかに力を入れたらどこかがなくなるリスク問題には、思想をもつことが重要であると述べました。

### 専門家の技術的な知識と市民の社会的判断力の協働が不可欠

世界を揺るがす危機ないし災害が頻発し、様々な課題が顕在しています。現在のリスク社会、トランスサイエンス（科学なしでは解決出来ないが、科学だけでも解決出来ない問題）な状況下では、科学の不確実性と技術の不完全性の中で私たちは意志決定をしなければなりません。また意思決定には、専門家だけではなく非専門家の常識、良識というようなものが期待されており、専門家の技術的な知識と市民の社会的判断力の相補的な協働が必要とされています。つまり、専門家には多様な選択肢の提示や意思決定の過程の開示など、情報の透明性の確保と、色々な人の意見を組み入れる仕組みの構築が求められており、市民は、専門家まかせから脱却し、科学の合理性だけでなく人間性をもって倫理問題として選択を考える必要があるということではないでしょうか。

そのためには、近代社会を導いてきた効率性や利便性を優先させる価値観を転換し、QoL（生活の質）、地域コミュニティの絆、地域の伝統文化など、定量化出来ない価値へまなざしを向けることも必要です。地球の持続可能性を考える時、技術的、経済的評価に先立つ社会の価値判断に基づいて私たちが判断することが、生態系および将来世代への責任ではないでしょうか。

文責：高等研事務局

パネリスト

鈴木 達治郎
長崎大学核兵器廃絶研究センター
副センター長・教授
専門は工学。原子力政策、核不拡散政策、科学技術政策との関係から、原子力と社会の問題に取り組む。

野家 啓一
東北大学
総長特命教授
専門は哲学・科学基礎論。近代科学の成立と展開の過程を、科学方法論の変遷や理論転換の構造などに焦点を合わせて研究。

長谷川 公一
東北大学教授
専門は環境社会学、社会運動論、市民社会論。社会運動組織の役割などに注目して、社会変動過程を理論的・実証的に研究。

薬師寺 泰蔵
慶應義塾大学名誉教授
専門は政治学。主に国際政治学と科学技術との関係を研究。

コーディネーター

村上 陽一郎
東京大学名誉教授・
国際基督教大学名誉教授
専門は科学史・科学哲学。安全学を提唱。安全を求める人間の営みを統一的に把握する試みを続ける。

所属・役職はフォーラム当時のものです

# 「持続可能社会の構築と科学」

基調講演

テーマ

## 科学者が人間であること

### ～ 科学も科学者も変わらなければ ～

講師 中村 桂子
JT生命誌研究館 館長

現代科学のありようへの疑問から生命の普遍性と多様性を総合的に捉え、関係と時間の中で解明する「生命誌」を提唱。「生きている」現象をそのまま見つめ、そこからいかに「生きる」かを考える知の形成に努めている。2013年アカデミア賞受賞。

### 新たな知を生むためには、科学者自身が日常と思想をもつこと

東日本大震災での原発事故、STAP細胞問題など科学と科学者のあり方を考えさせられることが続いています。自然科学と言いますが、実は科学は自然の中から因果関係で分かるところ、モデル化できるところを扱ってきました。自然に向き合うこと、これが今求められていることだと思います。

現在の科学は17世紀のヨーロッパでガリレイ、ベーコン、デカルト、ニュートンらにより始められたものであり、機械論的世界観をもっています。しかしここで確立された方法である還元と数式化で分かることには限界があります。しかも20世紀後半の科学は、自然が機械ではなく、生成し、変化するものであることを明らかにしました。宇宙、地球、生きもの、人間。つまり機械論的世界観から生命論的世界観への変化の必要性が科学の中ですでに起きているのです。これを進めて行く必要があると思います。

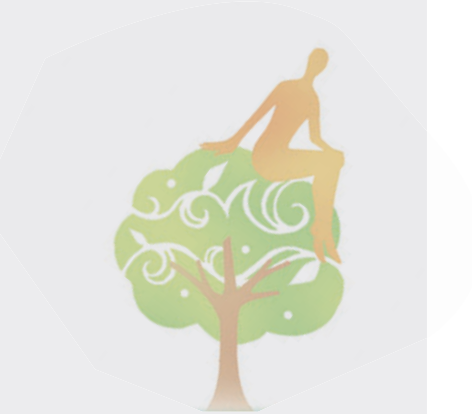
その一つとして、生きものたちの中にある38億年という時間と関係を知る生命誌を始め、人間は自然の一つであり、ヒトという生きものであるということを基本に、新しい知を作る試みをしています。生きものを研究しながら科学のもつ機械論的世界観の見直しをしていきたいと考えています。

ここで参考になるのが、大森荘蔵の「科学は自然を死物化しているから日常につながらない」という指摘です。大森は、科学者が研究で得た密画を、日常に見る生きた自然、つまり略画と重ね描きすることを求めます。そのためには科学者自身が日常と思想を持たなければいけないということになります。科学者がそのような視点をもつことによって、新しい知が生れると期待しています。

### 科学者は、研究成果を適確に美しく表現し、多くの人と共に楽しみ考えることが重要

ところで科学者は、知の成果を社会に発信することが重要です。まず論文を書きますが、それは音楽の楽譜と同じで専門家の中でしか理解されません。そこで、音楽が演奏されるように、研究成果を適確に美しく表現し、多くの人と共に楽しみ考えることが重要になります。科学の知識の広報でなく、世界観をもつ科学者の表現であり、発信です。

社会としては新しいルネサンス（人間復興）の時だと思います。それには、科学技術を相対化し、皆で情報を共有する必要があり、そこから生きものとしての人間が生きる社会をつくることができるのではないかと思っています。



2015年2月21日（土）
一橋大学一橋講堂
参加者:約130名
共催
京都府、関西経済連合会、京都商工会議所、公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構
後援
文部科学省、東京都教育委員会、科学技術振興機構、日本学術振興会、京都大学、京都産業大学、日本経済団体連合会、日本商工会議所、東京商工会議所、JT生命誌研究館、日本物理学会、日本生物物理学会

近代科学は人類に確かな恩恵をもたらしましたが、神戸や東北など過酷な自然災害の体験を通じて、近代科学とはそもそも何であったのかが根本的に問われました。社会的課題に寄り添うことの出来る科学とは何か、科学や科学者のあり方のみならず、科学に対する社会のあり方はどうあるべきなのでしょうか。

人·幸福·未来

講演&パネルディスカッション

テーマ

# 科学と科学者のありかたを問う

～ 来るべき時代に向けて ～

## サイエンティックな目というのは、認識を相対化できる目ということ

複雑多様な世界を要素還元して不変構造をみつけるという近代科学のあり方について、蔵本氏は「本来の科学の知とは、論理性・客観性・不変性で特徴づけられるような科学だけではなく、違った知のあり方があるのではないか」と提起しました。福笑いを例に「目口鼻耳は要素として不変であるがそれらを並べると色んな表情が生まれる。切断された個々の要素を『つなげる』ことで、新しい創発現象が見えてくる」と話されました。自然界にある「アナログ情報」が言葉や数値で認識されることによって「デジタル情報」になると言う永田氏は、「科学者はその認識しているものが世界の一部でしかなく、ある一つの角度から見た認識でしかないということにどれだけ自覚的になれるかが重要である」とし、「皆が右を向いていたら一回は反対を見てみる」、「サイエンティックな目というのは認識を相対化出来る目だ」と話されました。森里海連環学を提唱している田中氏は、被災地の復興が遅れている原因として、社会と科学の間に乖離が生じていることが大きな問題だと指摘します。次世代のことを考えた科学を作り直すことを踏まえて、「もう一度自然資本を見直し、社会がより持続的にそれを利用していくような経済の仕組みを作りあげることが重要である」と述べました。

## 社会の中から問いを探し出す、それが本来のサイエンスの出発点

人間を自然循環の中の一つに位置付けて考えた時に、近代科学は自然から離れてしまっているというだけでなく、社会もまた自然から離れてしまったのではないでしょうか。震災で被害を受けた東北の漁師の笑顔の写真から我々は何を問題として抽出できるか、社会の中から問いを探し出すということが非常に脆弱になっています。本来のサイエンスの出発点はそこにあるべきで、人間には想像力があり「このままの未来はどうなるのだろう」と想像が出来るのです。科学は孤立分断され専門細分化されるということは研究を進める上で必要なことですが、しかしその先に何があるのかという問題が問われます。生きているということを深く見ていくと、自分がどう生きるかというところまでつながるのではないでしょうか。科学の知と人間の生活との関わりにも科学は関心をもたなければならないのです。それをつなぐことが出来るのは、やはりそれを誰より見てきた科学者ではないでしょうか。言葉に出来ない知の感じ方というものがそれぞれ違っているのが本来の科学です。見方の違った意見を尊重するということも必要であり、科学者もそうでない人も日常的に一緒に考え、議論を積み重ねることが社会における一つの科学のあり方ではないでしょうか。

文責：高等研事務局

### パネリスト

**蔵本 由紀**

国際高等研究所 副所長・京都大学名誉教授

専門は非線形動力学、非平衡統計力学。自然界の同期現象を数学的に説明した蔵本モデルの業績で世界的に知られる。

**田中 克**

舞根森里海研究所 所長・京都大学名誉教授

専門は水産生物学。森林生態系と沿岸浅海域の関連に着目し、自然の繋がりと人の心の再生を目指す「森里海連環学」を提唱。

**永田 和宏**

京都産業大学総合生命科学部教授・京都大学名誉教授

専門は細胞生物学。大学在学中に短歌を始め、高安国世に師事、「塔」会員となる。宮中歌会始詠進歌選者

### コーディネーター

**尾関 章**

科学ジャーナリスト

朝日新聞社入社後、科学記者としてヨーロッパ総局員、科学医療部長、論説副主幹などを務める。

所属・役職はフォーラム当時のものです

# 第4回 けいはんなフォーラム「人類・その超えるべき課題の先の未来」

基調講演

（Photo: 浅野カズヤ）

テーマ

## 沈みゆく大国アメリカからの警告

～ 未来への選択 ～

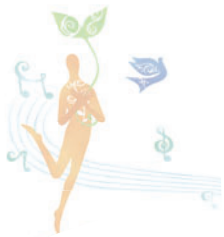
講師 堤 未果
ジャーナリスト・作家

ジャーナリスト、東京生まれ。NY市立大学大学院で修士号取得。国連、NGO、米国野村證券を経て現職。『ルポ貧困大国アメリカ』はシリーズ71万部のベストセラーに。最新作『沈みゆく大国アメリカ』シリーズも25万部を突破、ほか著書多数。NHK『マイあさラジオ』レギュラーなど各種メディアでの出演も多く、執筆・講演など幅広い活動を続けている。

### 宝物をもっていても、その価値に気づかなければ簡単に奪われる

何でも商品にして、株式会社化して、すべてを株主利益の数字で計って、数字にならないものは切り捨てていくことが、本当に人間にとって幸せなのでしょうか。

今世界では、一部の人の「強欲資本主義」が世界中に市場を広げようとしています。その中心であるアメリカの現場をしっかりと見た上で、日本は慎重に今後の方向性を決めて欲しいと思います。例えば、世界から絶賛されている国民健康保険は、私たち日本人の多くにとって、もう空気のような存在になってしまっています。でも素晴らしい宝物を持っていても、手にしている本人がその価値に気づいていなければ簡単に奪われてしまう。今最速で高齢化する日本の医療・介護が、100兆円市場の優良ビジネスとして、世界中から狙われていることをどれほどの人が知っているでしょうか？国民健康保険制度を崩してそこから参入したい人たちが沢山いるのです。私たちが当たり前だと思って無関心でいたら、あっという間に変えられてしまいます。アメリカもそうでした。国民が無関心だったことで、多くの制度を次々に、合法的に奪われてしまったのです。私の国日本には、同じ過ちを犯してほしくない。世界に誇る日本の宝、国民健康保険を守りなさいというのは、私の父の遺言でした。



### 人間として幸せに生きられる社会が、今真剣に問われている

人間にとって本当に幸せなものは何か。人間の未来は何を「ものさし」にしていくのか。最も効率よく利益を出す方法は、人間を数やデータにすることだと言った、ある大企業幹部がいます。多様性はないほうがいい。一人一人顔がある個人としてではなく、人間を物として仕分けていく。文化、伝統、通貨、言語、様々な価値観が共存していると効率が悪いからだと。みんな画一化して、会社もどんどん吸収合併して、本当に少ない数の会社が業界を牛耳って、全部傘下に入れていけばいい。無駄がなく、利益もあがる、株主も喜び、経営幹部の報酬もあがる。でもいったい誰の為に？私たちはモノでもないし、数字でもありません。一人一人名前があり、生きてきた歴史があり、子供たちを慈しみ、将来の夢があります。かけがえのない個人が、本当に人間として幸せに生きられる社会。アメリカ人だけでなく私たち日本人も、今真剣に問われているのです。いったいどちらの社会を、子ども達に残したいですか？と。

来賓挨拶

京都府副知事　山下 晃正 氏

関西文化学術研究都市推進機構
理事長　柏原 康夫 氏

2015年3月12日（木）
**けいはんなプラザメインホール**
参加者:約660名

**共催**
京都府、関西経済連合会、京都商工会議所、公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構

**後援**
国立国会図書館関西館、大阪府、奈良県、生駒市、木津川市、京田辺市、精華町、奈良市、大阪大学、大阪国際大学、大阪電気通信大学、関西外国語大学、京都大学、同志社大学、同志社女子大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、立命館大学、大阪商工会議所、奈良商工会議所、（株）けいはんな、京都銀行、南都銀行

人類と地球が直面している諸課題は、グローバリゼーションによる国や地域の特性を考慮しない画一化の進展と、地球の有限性や人知の限界を考慮しないまま「成長」と「競争」を継続したことに起因しています。「人類の平和的・持続的共存」という考え方への転換に向けて、今私たちは何をなすべきでしょうか。



パネルディスカッション

テーマ

# 人類・その超えるべき課題の先の未来

## どれだけの自然資本から、どれだけの幸せを作るかが重要

有限資源の地球で、平和的な共存をしていくためにはどうしたらよいかという問い対し、「文化、芸術、人文学は万能ではないが、無力でもない」と大原氏は訴えました。他者を理解することをコンセプトとするケ・ブランリー美術館のように、世界のあらゆる異文化を理解しようとすることが大事ではないかと問いました。「どれだけの資本からどれだけのモノが出来るかではなく、どれだけの自然資本からどれだけの幸せを作るかが重要」だとする枝廣氏は、自然が壊され人々が幸せになっていないのに、これまでどおりの経済成長を追い求めて本当に良いのかと問題提起しました。世界の異常気象と二酸化炭素問題について言及した黒木氏は、「エネルギーを節約することは、結局はエネルギーを生産する事に繋がる」と主張しました。村上氏は「人間の生命こそが最大の価値の一つであるが、その価値自体が、文明が成長し、科学による延命技術が発達すると、自分達が本来もっている価値観に抵触してしまう」と言い、「それをどう乗り越えるか議論して問題を共有しよう」と訴えました。有本氏は「討論をすることによって新しいものが生まれてくる、人間の新しい資質も生まれてくる」というハイゼンベルクの引用と共に、「みんなで一緒に語り行動する仕組みを作ろう」と呼びかけました。日本の歴史学を専門とする笠谷氏は、「自然との共生、自然に身を任せるという日本の価値観が、GDP至上主義に代わる新たな価値基準の構築に資する」と訴えました。

## 文化・芸術などの人文社会系の知をどう社会に取り込んでいくか

地球上の資源が有限であるという認識のもとに、どうすれば持続可能な社会を築いていけるのか、そして多様な文化や価値観をもっている社会がいかに平和的に共存していくのかという観点から、レジリエンスの重要性が指摘されました。レジリエンスとは「しなやかな強さ」と訳されることもあり、竹のようにしなやかに折れない力を指します。レジリエンスを創り出す要素として、多様性、モジュール性、フィードバック機能の3つが必要とされています。想定外のことが起こってもすぐに立ち直れるような力をつけておくという考え方です。そのとき、文化・芸術をはじめ人文社会系の知をどう社会に取り込んでいくかが重要となるでしょう。科学技術イノベーションのみ切り取られ、声高に叫ばれる今日の風潮に対して、私たちの住む多様な社会をいかにより良くしていくかということを皆で考えること、常に自分の価値観をリフレッシュしながら行動パターンを変えていくことが、社会の力を強めることにつながります。東日本大震災という自然災害を経験した日本に対して、諸外国からは新しい価値観や哲学が日本から発信されるのではないかと期待されています。私たちの伝統文化を背景にしたこれからの社会のあり方、今日の持続不可能な社会から乗り換える船を早く作る行動、最初は小さい動きかもしれませんが地域レベルから始めることが大切です。

文責：高等研事務局

### パネリスト

**有本 建男**
政策研究大学院大学教授・科学技術振興機構研究開発戦略センター 副センター長
専門は科学技術政策、研究開発ファンディング・システム。科学技術基本計画など科学技術政策の策定と実施に長年参画。

**枝廣 淳子**
東京都市大学教授・
幸せ経済社会研究所 所長
GDPだけでは測れない地域の幸せを高めていく考え方の枠組みや持続可能な社会・経済会のあり方について研究。

**大原 謙一郎**
公益財団法人大原美術館 理事長
倉敷レイヨン（現㈱クラレ）副社長、㈱中国銀行副頭取、岡山経済同友会代表幹事、岡山県教育委員会教育委員などを歴任。

**笠谷 和比古**
国際日本文化研究センター研究部教授・
伝統文化総合研究プロジェクト長
専門は歴史学（日本近世史、武家社会論）。近世の国制と天皇制、武士道の思想と行動形態を研究。

**黒木 登志夫**
日本学術振興会
学術システム研究センター 相談役
専門はがんの細胞生物学。1970年、試験管内発がん実験成功により第4回高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。

**村上 陽一郎**
東京大学名誉教授・
国際基督教大学名誉教授
専門は科学史・科学哲学。安全学を提唱。安全を求める人間の営みを統一的に把握する試みを続ける。

### コーディネーター

**長尾 真**
京都大学名誉教授・
京都大学元総長
専門は自然言語処理・画像処理・パターン認識。情報処理分野の先駆的貢献者。

所属・役職はフォーラム当時のものです

公益財団法人
国際高等研究所

〒619-0225　京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005 http://www.iias.or.jp

2016.01-R01